らき☆すた　――ファーストキスの味は――

埼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
らき☆すた　――ファーストキスの味は――

【Ｎコード】
Ｎ２０８８Ｆ

【作者名】
埼

【あらすじ】
『近くにありすぎて、それがどれだけ大切なものか気付かないことがある』。どこかで誰かが言っていた言葉が最近になってようやく理解出来た。――――目を閉じて、ぐっと手の平を握って、開いて。……よし、心の準備は完了した。今日もあいつの前で笑ってやれる。開いた目であいつ――泉こなたのいる病院を見上げ、俺は止めていた足を動かした。

泉こなたは薄く、それでいて優しげに微笑んで見せた。
そんな笑顔は、こなたには似合わないなと、場違いにもそう思った。

リノリウム張りの床を踏みしめて、俺は目的の部屋に足早に向かっていた。
鼻腔をアルコールや薬の匂いがくすぐる。

……何度来てもこの薬の匂いは慣れない。
それにこの病棟はまだマシな方だが、どうにも雰囲気が暗い。まぁ、怪我なり病気なりをしてここに来ているのだから、明るい雰囲気を求めること自体がずれているのかもしれないが。

ふと子供が多くいる病室を覗く。
ぎゃーぎゃーとわめきあっている入院していると思われる子供と見舞いに来たと思われる子供を見て、思わず笑みが浮かぶ。
それ以外にも、各々騒ぎあっており、他の病室にはない雰囲気である。
病院で騒ぐのはあまりよろしいことではないが、子供は元気が一番だ。それに騒げるということは退院が近いということだ。良いか悪いかと言われれば、当然、良いことだ。

再び歩みを開始する。
途中ですれ違った看護師や医者に会釈しながら、後ろで先程の子供たちが看護師たちに怒られている声が聞こえてきて苦笑してしま

う。

そうこうしてる間に、目的の部屋の前に辿り着く。

他の病室と違い、扉は閉められており、ネームプレートも一つしか使用されていない。まぁ要するに個室である。

片手に持った、あまり鮮やかではない花束を目を落としつつ、ドアをノックする。

「はいは～い、勝手にどーぞー」

中から聞こえてきたあまりに元気な声に、相変わらずだな、と呟きながら扉を開ける。

「ん～、さすがだねぇ。ぴったり時間通りだよ」

「……前に遅れてきたら一日中むくれてたろう」

小さい手をひらひらとさせながら俺を迎え入れたのは、簡素なベッドに横になっている蒼い髪の女――こなただ。

「んん、そんなこともあったかもしれないねぇ」

目を細めて常の様に笑うこなたに、俺も笑みを浮かべながら手に持った花束の処理を始める。

「花瓶、まだあるか？」

「そこの戸棚の中にあるかも」

指を差す先の引き戸を開けると、ちょうどいいサイズの花瓶が一つだけあった。

「お前って意外と友達多いよな」
「ずいぶんと酷いこと言うねぇ。私ってそんなに社交性無いように見える？」
「無いように見えるとは言わないが、あるようには見えないな」

こなたがむくれるのを確認してから、花瓶を取り出して流し台に向かう。
中の埃を水で流しつつ――と言ってもつい先日も使われていたのかてんで埃もついていなかったが――水を貯めて、そこに花を差していく。
すでに何回も行っている手馴れた作業だ。

花瓶の周りの水を拭き取り、こなたが横になっているベッドの枕元に向かう。
そこにはすでに色とりどりの花が入った花瓶が何個も置いてあった。

「まるで新装開店だな……」
「昨日とかも来てくれてたからねぇ。みんな大学の単位とか大丈夫なのかな？」

少し前にこなたの病室ではちあわせた紫の髪の人やピンクの髪の人を思い出しながら、明らかに他と比べると見劣りする花瓶を置く。

そこで一息つくと、椅子を近くに引き寄せて腰かける。

「最近、花を買ってきてくれることが多くなったねぇ。私としては甘いものとか食べ物の方が嬉しいんだけど」
「それはこの前買ってきたろ。あんまり食うと寝てばっかなんだから肥えるぞ」

「相変わらずトゲトゲしてるねぇ。そんなんじゃ誰も寄りつかないよ？」
「……放っておいてくれ」
……思ったよりもこなたに大人の対応をされた。そのバツの悪さから、視線を他所に飛ばす。
見馴れてきた病室に張られているカレンダーはサンタクロースと雪ダルマの絵が描かれている十二月まで進んでいた。
「もう三月経ったか……」
「早いねぇ。あと二月くらいかな？」
俺が漏らした感慨に、こなたがいつものトーンでそう付け加える。
何があと二月なのか？　俺は何も聞いてはいないが、そのことについては問い質さない。
その言葉の指し示す意味は明白だからだ。

九月の半ば。大学から帰ってきた俺に、母親が使いを命じてきた。
数軒隣の泉家に、おかずのお裾分けを持っていけ、というものだ。
泉家は早くから母親を亡くしており、今は父親一人で娘を育てている。とは言っても、娘の方は俺と同い年だ。もう育てられているという感じではないだろうし、何年か前から従妹も同居している。そういった点ではもう苦労していないだろう。
現在では家事はその娘、父親、従妹が分担して行っているらしい。まだこなたが小さかった頃は父親も不慣れな家事にてんてこ舞いで、見かねた近所の人たちが料理のお裾分けなど、親切の押し売りにな

らない程度に手伝っており、今でもその名残かこうやっておかずを持っていくことがある。

断る理由もない。タッパーに詰まった角煮やら漬け物やらをビニール袋に入れて家を出る。

泉家はすぐ近くだ。

泉家の娘、泉こなたは俺の幼なじみだ。

なんの因果か、小学校から高校、果ては大学まで一緒であった。

それまであまり話すことがなかったのだが、さすがに大学まで一緒だと話す機会も多くなる。こなたの『特殊』な趣味以外では、それなりに話が合ったので今では友人のレベルくらいにはなっている。

ビニール袋片手に、インターホンを鳴らす。

十秒、二十秒。

……出てこない。

もう一度鳴らして――反応がない。

時間は夕刻だ。

親父さんはともかく、こなたもいないのか？

あのインドアでも外に出るのか、と妙に感心しながら何となくドアの取っ手を握って引いてみると――開いた。

一瞬、どうするか迷ったが、物が物だけに外に置きっぱなしというわけにはいかないだろう。

「……おじゃましまーす」

とりあえず声を出しながら玄関に入ってみるがやはり反応がない。

しょうがない、と玄関におかずを置いて帰ろうとした時、家の奥

からカン高い音が聞こえてきた。

……やかんの音？

居留守でも使われているのだろうかとも思ったが、それならば玄関が開いた音に気付いて確認くらいはするはずだ。

ため息一つついて、家の中に入る。何にせよ、やかんの火くらいは消さねばまずいだろう。

次第にカン高い音が大きくなっていくなか、歩みを進めるとキッチンに辿り着いて――時間が止まる。

そこには子供と見紛う容姿の女、こなたが倒れていた。

息が出来ずに、口を二、三度パクつかせて、持っていたタッパーを床に落とした。

近くで鳴っているはずのやかんの音が、酷く遠くで鳴っているような気がした。

その後のことはよく覚えていない。

俺が救急車を呼んだらしいのだが、気が動転していたのか全く覚えていない。

気がつけば俺は病院の待合室の椅子に座っていて、隣にはこなたの親父さんが座っていた。

いつものようにへらへらとしたひょうきんな姿ではなく、俯いてただ娘の無事を祈る父親の姿――――その姿を見て、ようやく頭が動き出した。

「……こなたは？」

俺が吐き出した、ある意味空気が読めていない発言に、一瞬親父さんは固まったが、すぐに合点がいったように話し始めた。

「……やっぱり聞いてなかったか。こなたは今、手術中だ。一刻を争うらしい」

「……そう、ですか」

それだけ言って、思わず俯いてしまった。

事態のあまりの重さに、頭が思考を放棄していた。

何も考えたくない。

思考をすれば、この現実を受け止めねばならないから。

「……ありがとう」

そんな言葉が、聞こえた。

一瞬、誰が誰に言っているのかわからなかった。

「君がいなかったらこなたは確実に死んでた。あと三十分遅かったら手の施しようがなかったかもしれないと医者に言われたよ」

「……けど」

二の句が繋げなかった。

…涙が溢れたからだ。

「けどもへちまもないさ。……本当にありがとう」

「俺は……俺は……」

それ以上は、何も言えなかった。

俺はリンゴの皮を剥いていた。来た当初は太ったリンゴを次々とミイラにしていったものだが、今では中々に綺麗に剥くことが出来るようになった。

「病人にリンゴか～。ベタだねぇ」
「うるさい。あんまり文句を言うなら俺が食うぞ」
「あぁ！　嘘だよう、リンゴが食べたいよう！　病院のご飯は激しく不味いんだよ！」
「わかったよ、危ないから手を出すな！」

割と本気で暴れだしたこなたを宥めつつ、置いておいた皿に切り分けたリンゴを乗せていく。

「お、ウサギだ。腕を上げたねぇ」
「残念なことに何匹かは片耳だけどな」

出来たリンゴのウサギにつまようじを刺して移動可能なテーブルに乗せてやる。
早速、こなたがリンゴを口にする。
しゃりしゃりとリンゴを咀嚼する音が響き、口の中にリンゴが無くなると、こなたが極上の笑みを浮かべる。

「あぁ～、さすがかがみん。私のツボを心得ていらっしゃる！」
「よかったな、いい友達持って」

ひょいひょいと皿の上のウサギたちを胃に収めていくこなたを見ていると、ついつい笑みが浮かんでくる。
そんな俺を見て、こなたが口を開く。

「食べる？」

片手に持ったつまようじをくるくるとさせながらこちらに問い掛けてくる。

少し悩む。
このリンゴが入っていたお見舞いセットを買ってきたのはこなたの友達だ。
それを赤の他人である俺が食っていいものなのだろうか？

「遠慮はいらないよ～。どうせ全部は食べきれないんだから」
「……それもそうか。だったら貰おうかな」

立ち上がって新たなつまようじを持ってこようとした時、俺の服の裾が引っ張られる。

「私が食べさせてあげるよぉ。ほら、あ～んしてあ～ん！」

悪戯を思い付いたような顔でこなたがこちらにつまようじの刺さったリンゴを差し出す。

……。

「……」
「……」

「……」
「……」
「あっ、腕がブルプルって、プルプルって！」
「わかったよ！　食えばいいんだろ、食えば」

俺が折れたことで、してやったりの顔をしているこなたに頬がひきつるが、言ってしまった以上は食わなければなるまい。
俺が腰を浮かせて、こなたが更に腕を伸ばして。
あともう少しでリンゴが俺の口に入るかというところで、そのリンゴが虚空を薙ぐ。

俺の身体は自分自身驚くほど迅速に、かつ冷静に動いていた。

「……あっ、ごめん」
「問題ない」

ベッドから落ちそうになったこなたを負担の掛からないようにベッドの上に戻す。

捲れた毛布から見えた包帯が巻かれた足は、膝下から先が無かった。

こなたの発症した病は原因から治療法まで、何から何まで不明な病気だったらしい。
ただ一つ。わかっているのは症状だけだった。

身体の末端、つまり足から頭に向けて、徐々に腐っていく。
腐った部分は血流に乗せて毒素を脳に送り、それすらも腐らせる

悪病。

最初に倒れた時は脳の炎症はさほど酷くなかったらしく、投薬で事なきを得た。だが、足は違っていた。

外からは視認することが出来るほど青くなっており、事実、すぐさま切断しなければ、命に関わるほど腐敗が進んでいたらしい。

この病気には治療法がない。正確には見つかっていない。

今現在、出来ることと言ったら、腐っていく部分から輪切りにしていくか投薬で脳の炎症を抑えることくらいだ。

詰まる所、こなたは解除不能、確実に爆発する時限爆弾を背負わされたということになる。

……あまりにふざけていた。理不尽が過ぎていた。

原因が不明で、その上治療法が無い？　唯一、出来ることが足を輪切りにしていくことか延命処置の投薬くらいだと？

何もしていない、少し趣味が悪いだけのあいつが何でこんな重荷を背負わなければならないのだ！

死んだ方がいい人間なんてのは他にもっといたはずなのに！

「……何で！　何で！！　何でだよッ！！」

俺はその話をこなたの親父さんから聞いたとき、頭を掻きむしってそう叫んでいた。

涙は出なかった。

それよりも怒りが勝っていたからだ。

だから、集中治療室からようやく出てきたあいつの顔を見たとき

に、呆気にとられてしまった。

笑っていたのだ。

いつものように、明るくて無邪気で、それでいて何かを企んでそうな笑顔で。

すでに足が無いはずなのに。

薬で抑えていても、頭は割れるほど痛いはずなのに。

腕には注射針が刺さっていて、いやが上にも病気を認識しなければならない状況なはずなのに。

あいつはいつものように笑ってみせたのだ。

その姿を見て、俺は気付いてしまった。

俺はあいつのことが好きなのだ。どうしようもないほどに。

「最初はねぇ、ゲームとか漫画の主人公みたいでちょっとかっこいいかも、なんて考えてたんだ」

毛布が掛かった膝までしかない足を見つめて、こなたがそんなことを言い出した。

「けどねぇ、やっぱりどうしようもないくらいに痛くて、寂しいときがあるんだよね」

少し、声が震えていた。

……俺は、気の利いた相槌すら打てなかった。

「高校もすごく楽しかったけど、大学もすごく楽しかったし、元気

だったらどんな事してたのかなって考えたら、この足が恨めしかった」
「……泣かないのかよ」
俺の急な質問に少し驚いた様子を見せたこなただったが、すぐに質問の意図に気付いたのか、次にはその表情を変えていた。
「泣かないよ。みんなが変わりに泣いてくれたから」
泉こなたは薄く、それでいて優しげに微笑んで見せた。
そんな笑顔は、こなたには似合わないなと、場違いにもそう思った。
「みんなみんな泣いてくれた。最初はトイレに行くって言ってかわるがわるいなくなったんだけど最後はみんなで大泣き」
その時の光景を思い出したのか、苦笑いを浮かべたこなたが不意にこちらに手を伸ばしてきた。
「……何だ？」
「ほらっ、君も泣いてくれる」
俺の頬をこなたの指が撫ぜる。その指先は微かにだが、確かに濡れていた。
……我知らず、泣いていたらしい。こいつの前では泣かないと決めていたのに。
「みんなの涙を見るとね、心があったかくなるんだ。心の傷が化膿しないで治るんだよ。……だから、私は泣かなくてすむんだよ」

「……嘘つけ」
「へ？」
今度は俺がこなたの頬を撫でる。
「我慢するなよ。お前のことだから、きっと泣けば皆に迷惑を掛けると思って我慢してたんだろ？」
「私、は……」
「感情に蓋をするなよ。お前の気遣いは嬉しいけど……俺はお前の本当の気持ちを知りたいよ」
「……あ……あう」
瞳に涙を溜め、言葉をうまく発声できず、それでも最後の一線を越えずに踏み止まるこなた。
俺の身体は、無意識的に動いていた。
身体を寄せて抱き締める。俺に出来たのはただそれだけだった。
「う……うあああぁぁぁッッ！！」
抱き締めた腕の中で、漏れ出てきたのは溜め込んでいた思いのカケラだった。
「あはっ……ありがと、すごく楽になったよ」
「……そうか」
「むぅ、そういう時はもう少し気の利いた言葉をかけないとフラグは立たないよ」
「なんだよ、フラグって……」

少し枯れているが、それでも先程よりも明るい様子のこなたの声に呆れもしたが、何よりも安堵した。
やはりいつものように笑っていてほしいと思う気持ちもあったからだ。我ながらワガママというか矛盾したことを言っているものだ。
苦笑いを浮かべながら抱き締めていたこなたを離そうとする。
……冷静に考えてみるととんでもなく恥ずかしいことをしていた。

「……おい」
「ん……まだダメ」

離そうとした腕をぐっと掴んで俺を止めたこなたは、逆に抱きついてくる。

「さすがに素面では恥ずかしいぞ……」
「……一つだけお願いがあるの」

赤面する俺を無視して、どこか照れ臭そうに頬を赤らめて言葉を繋ぐこなたの様子に面食らいながら次の言葉を待つ。
確かに感情に蓋をするな、とは言ったものの、これだけ変貌されるとこちらとしては焦ってしまうわけで……。

「……キス……したいな」

こなたは赤面しながらもじもじとそんなことを呟いた。

……いや、吹き出した。それはもう豪快に。

「……な、何を！」
「……そのさ。もういつまで元気でいられるかわからないし未

体験のまま、ね……」

少しだけトーンの落ちたその声に、俺はハッとした。

一瞬、忘れていたのだ。こなたの病気のことを。

「やっぱ……嫌、かな？　私とじゃ」

「お前は……どうなんだよ？」

「……むぅ、そんなこと聞かないでよぅ」

いつものようにむくれるこなたを見て、胸の支(つか)えが取れた気がした。

それからの行動は速かった。

こなたの顔を片腕で引き寄せて固定し、俺も顔を近づけて目を合わせる。

「今日の昼飯はラーメンだった。普通の醤油味だがニンニクも微量入っていたかもしれない。一応ガムは噛んだが完璧とは言い難い。あと、こういったことをした経験が無いから、もしかしたら色々とトラブルが起こるかもしれないが、俺も対処できないぞ。あと俺はお前のことが大好きだ。もうどうしようもない程に。先のような事を言われると、俺もうっかり勘違いしてしまうかもしれないがいいのか？」

思いっきり、息を吸い込んでから一息に言ってやった。ついでに秘めたる思いまでどさくさに紛れて暴露してやった。

少し驚いたような顔をして固まったこなただが、次の瞬間には笑って見せた。

「そういうことは女の子に聞かないものだよ？　男の子は多少強引

な方が萌えるんだよ」
「……そうか、では」

どちらからでもなく目を瞑る。……いや、こなたが目を瞑ったのを確認したのだから俺の方が後に目を瞑ったのか？

「そんな野暮なことをキスする前にぶつぶつ言うかな……」
「……緊張しているんだ。というか口に出てたのか」

自分の性格に軽く後悔しながら、今度こそ自分の顔をこなたの顔に近づける。

経験がないから技術もない。ただただ自分の想いを告げる無骨なキスだ。
ただ、今の俺たちにはそれだけで十分な気がした。

……世にいうファーストキスの味は、林檎の甘酸っぱさと、薬のツンとした匂いがする、奇妙なものだった。

「……なにやってるの、こなた？」
「なにってかがみん、創作活動だよ！」

柊家のテーブルに突っ伏すこと三時間。
勉強を教えて、と家に来たはずの彼女———泉こなたのその返答に、柊かがみは額に青筋を一つ浮かばせる。

「へぇ、アンタって自分で小説を書いたりするんだ……」

「まぁねー、私、絵ヘタだし」
「わぁ、すごいねぇ。けど、こなちゃんがこんな内容書くんだー、ちょっと意外」
「んー、新境地を開拓っていうかねぇ。けどまだまだ訂正しなきゃいけないとことか、細かく書き足さなきゃいけないところもあるし、もうちょっと時間が必要かなぁ」
「へぇ……、随分と力を入れてるじゃない。で、アンタはわざわざウチまで何しに来たんだっけ？」
「んんー、勉強だ……ったよね」

そこでこなたもようやく気付いた。
相対している彼女の拳が何かを堪えてふるふると震えていることに。この場合、何を堪えているかなど、わざわざ説明する必要もないだろう。

「だったら……、だったらさっさと勉強しろォォォッ！！」

かがみはまるで、居合い抜きのように刹那の閃きの中でどこからか取り出したハリセンを抜刀（鞘無し）。危険を察知して逃げようとしたこなたを一撃で昏倒させた。

…この後、何故かつかさまで巻き込んでお説教会が開かれた。
結局、勉強どころではなくなったのは、まぁ説明するまでもないだろう。

平和な一日の、何のことのないのどかな生活の一場面であった。

（後書き）

短編四作品目にして初のＦＦ小説です。
こういっては何なのですが、実は作者、らき☆すたというアニメをあまり知りません（爆）
随分前に、某大型動画サイトで何話か見て面白いなーと思い、特に予備知識もないままいきなり書き出した次第です。
その際には、某ペディアを参考にしたりしたのですが、間違いがあったり、違和感を感じたりした方もいたかもしれません。
その時は、そこら辺を指摘していただけるとありがたいです。他、感想なども頂けると嬉しいです。

……それでは、これにて失礼します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2088f/

らき☆すた　――ファーストキスの味は――

2010年10月8日21時33分発行